

啓き発く

丸尾 浩一

(教育・昭和 61 年卒・坂出市市民生活部人権課)

昨年度 3 月 31 日をもって 37 年間お世話になった学校教育の現場を退きました。私にとって財産となり、何事にも代えがたい経験となったのは、①小・中学校で人権・同和教育を根底に実践してきたこと②退職までの最後の 11 年間で坂出市立西庄小学校で過ごしたこと③校長として教員と共に取り組んだ授業づくりです。

4 月 1 日から坂出市市民生活部人権課でお世話になっています。勤務して 3 日目には、坂出市の初任者職員の皆さんに「人権問題」をテーマに研修をさせていただきました。先に記した学校現場での経験をもとに、職員の皆さんとやり取りをしながら進めていきました。やはり研修も授業と同じように、講師の教材解釈力と教材研究にすべてが規定されることを痛感しました。さらに、人権啓発に求められるのは、根拠と説得力です。以下に示したのがこれまでの研修後のご意見・ご感想です。

- 小学校、中学校のときに授業で差別のことを学んでいて、分かっていると思っていただけ、今回なぜ差別が始まったのか、なぜ今もそのことを言う人がいるのかについて、やっときちんと理解できた。
- 県外出身であり、同和問題というものを恥ずかしながら知らなかった。今回研修を受け、本問題を知り、そして、人権というものを今一度考えさせられた。とても聞きやすく、勉強になった。
- ◎ 資料を読んで少し泣きそうになった。「字がよめる」を当たり前と思っていた自分に気づいた。当たり前の幸せに気づかせて思い出させてもらい、ありがとうございます。
- ◎ 差別の成り立ちについて、こんなにくわしく教えてもらえたのははじめてだったので、自分が「なんとなくこうだろう」と思っていたのとかなりちがっておどろいた。毎年受けている研修の中でも特に心に残る時間だった。

研修に参加される方の多くは、私にとって初めて出会う方がほとんどです(○は坂出市初任者職員研修から、◎は坂出税務署職員研修から)。研修後の回答を読むと、研修をしたからと言って啓発が完結するものではないことがわかります。繰り返し社会啓発をしていくことの大切さに気づかされます。

若い人たちを中心に、自らの、または友だちの結婚など社会生活を通して、差別と向き合うかもしれません。もし差別に屈服してしまったら、差別はなくなりません。若い人たちが差別と闘い、克服するならば、世の中は変わる可能性があります。しかし、差別について知らなかったなら、反論もできません。そして、差別されている人を見捨てることになってしまいます。だからこそ、一度の研修で扱う教材を十二分に検討して初めて出会う方がたの前に立つことが、私の責任であることを改めて痛感しています。人権・同和問題を自分事として捉え、差別と闘う世の中にしようと考え、実践していこうと参加した方が思える研修にすることが、私の役割なのだと思うのです。そのために今後も講義を聞くだけの受け身の研修を減らし、自ら考え発言する参加型研修に重点を置き取り組んでいこうと思います。

もうすぐ高校生の皆さんとの研修が始まります。